

# 内容相対主義の可能性

高谷 遼平 (Ryohei Takaya)

日本学術振興会/東京大学

内容相対主義 (content relativism)、もしくは指標的相対主義 (indexical relativism) とは、現代の哲学的意味論における一つの立場である。おおまかに述べればこの立場は、発話の内容がその発話が査定される文脈 (assessment-context) によって変動することを許す立場であり、J. マクファーレンらによる一連の研究以降支持を集める真理相対主義 (truth relativism) と対置される。内容相対主義と真理相対主義が何を共有し、どの点で異なるのか、相対主義と文脈主義というより大きな対立構図も含めて見ていこう。

## 1. Tofu is tasty.

いま、1 がマスミによってハルカに対して発話されたとしよう。また、マスミは豆腐を好み、ハルカはそうではないとしよう。このとき、D. カプランやD. ルイスによる二重指標意味論以降の標準的な立場——指標的文脈主義——によれば、マスミはマスミにとって豆腐は美味しいという真なる内容を主張している。このことは、二重指標意味論の観点では、1 は発話文脈における味覚の基準を含む内容を表現する、という形で説明される (いまの場合発話文脈の味覚の基準はマスミの基準となる)。対してもう一つの文脈主義である非指標的文脈主義によれば、発話文脈における味覚の基準は内容に含まれることなく真理値にのみ関わるため、マスミの1の発話は豆腐は美味しいという内容を表現し、この内容がマスミの基準のもと真であると値踏みされる。

次に相対主義は、マスミの主張に関わる味覚の基準として発話文脈ではなく査定文脈を持ち出す。まず真理相対主義によれば、マスミの1の発話は豆腐は美味しいという基準中立的内容を表現し——この点では非指標的文脈主義と等しい、この内容が査定文脈における味覚の基準のもと値踏みされる。したがって、誰がこの内容を査定するのかによって最終的な真理値は変わりうる。例えば1を聞いたハルカが査定者ならば、この内容はハルカの基準のもと値踏みされ、偽となる。対して内容相対主義は、査定文脈の味覚の基準が内容に含まれると考えるため、ハルカの1の発話は査定者がマスミならばマスミにとって豆腐は美味しいという真なる内容を、査定者がハルカならばハルカにとって豆腐は美味しいという偽なる内容を表現することとなる。

以上からわかるように、現代の哲学的意味論には、発話の真理にどのような文脈がいかに関わるのか、具体的には、査定文脈を認めるのか否か、そして文脈の内容への影響を認めるのか否かという二つの物差しに応じて、四つの立場が存在する。そのなかで内容相対主義は、上記の具体例からも予見されるように、意味論としての有用性という点でも標準的メタ意味論との整合性という点でも問題含みの立場とされる。

本発表では、内容相対主義もしくはこれに類する立場から種々の意味現象の分析を試みた先行研究（例えば Cappelen (2008), ‘The Creative Interpreter’; Egan (2009), ‘Billboards, Bombs and Shotgun Weddings’; Weatherson (2009), ‘Conditionals and Indexical Relativism’, von Fintel&Gillies (2011), ‘Might’ Made Right’など）を参考に、いわゆる認識様相（epistemic modal）に関する内容相対主義の可能性を探る。具体的には、認識様相文の発話者が後にその主張を撤回（retract）するケースと自らの主張を堅持（stick to one’s guns）するケースに焦点を当て、内容相対主義がこれらのケースに適切な分析を与えられるのか検討する。一般に、撤回のケースは指標的文脈主義と非指標的文脈にとって不利なデータであり、堅持のケースは真理相対主義に不利なデータであるとされているため、もしも内容相対主義がいずれのケースをも分析可能ならば、少なくとも認識様相に関しては内容相対主義にも優位性があるということになるだろう。